

加害者診察100人超 精神科医・福井裕輝さんに聞く

「病」向き合い治療を

「ストーカー」事案に対処する「男女問題解決支援センター」（東京都千代田区）を2013年6月に開設し、代表理事として加害者の治療にあたるのが精神科医の福井裕輝さん（44）。加害者に共通する傾向を「ストーカー病」と名付け、診察した「患者」は100人を超える。警察庁の依頼で開発した加害者の危険度を判定するためのチェック票は、全国の警察署で活用が始まった。加害者治療の意義について福井さんに聞いた。

【林奈緒美】



福井裕輝さん

治療に訪れる加害者の多くは、失態直後の状態が続いているようなもので、とても苦しんでいる。「つまりとうのは彼女（彼）が気持ちを理解してくれないから」「本当は、ただ自分のことが好きな

恨みが深くなったス

理解していても恨みの



なくせストーカー

トーカーは、相手が不幸に陥り、苦しむ姿を見ることで自分の苦しみが和らぎ、快楽のように感じる。逆に、相手が生き生きと輝いている姿を見ると、裏切られたように感じ、許せないと考える。

警察の警告で約8割の人はストーカー行為をやめる。残りの約2割は、頭では違法だと理解していても恨みの

「自分こそ被害者」脱却手助け

感情を制御できない。殺人事件に発展するケースが何度もあることから分かるように、自暴自棄になっている人には何の抑止力も働かない。病人として向き合い、適切な治療をすることが必要だ。

治療では、例えば車で待ち伏せをしてしまおう人に「本を読む」「コンサートに行く」など、その人にとって効果的な方法を試してもらい、待ちぶせに行くことを1回でも2回でもよいからやめさせる。

一方で、待ち伏せに至った経緯、感情を書き出してもらおうと「直前に上司から怒られた」「朝から、むしゃくしゃしていた」「さまざまな要因がある。上司はあなたを育てようと注意している

ただだよ」と助言するなど、行動の歯止めになるような考え方を提示したり行動パターンを増やしたりすることで少しずつ依存の対象から離れさせていく。

チェック票は、被害者の申告をもとに加害者の危険度を測る。神奈川・逗子ストーカー殺人事件で被害女性の相談に乗っていたカウンセラーに被害女性になりきってもらい、票に当てはめたところ、加害者について最も危険度が高いという結果が出た。チェック票だけに頼ると、冤罪や見落としを招く可能性がある。しっかりと定規ではなく、柔軟に活用してもらいたい。インタビューの詳しい内容は毎日新聞のニュースサイトに掲載します。